

公益財団法人青森県体育協会 平成27年度加盟団体会長等研修会「講演」

期日 平成27年12月10日(木)

場所 ウェディングプラザ アラスカ

演題「スポーツ振興と国際交流」～2025青森国民体育大会に向けて～

講師 一般財団法人自治体国際化協会

事務局長 田辺 康彦 氏

只今、紹介いただきました田辺です。本日はお招きいただきまして誠にありがとうございます。私は2009年度から2011年度まで、青森県総務部長として勤務させていただきました。当時は、現在、県体育協会会長の蝦名さんが副知事で、専務の田澤さんが総務部の次長でありました。蝦名会長は、当時からとてもユニークで、私の尊敬する先輩の一人ですが、最も見習うべきは即断即決でして、意志決定が非常に速いところでもあります。このたびの私に対する講演依頼についても、先般、蝦名会長が上京されたときに、私の事務所においていただき、国際情勢とスポーツに関するお話をした際、会長は「すぐに本県に来てもらって、この話をしてもらいたい」とその場で即決され、この度、このような機会を得ることとなりました。

私自身、過去において、青森県体育協会と密接な仕事をしてきたかという、そうではありません。私にとって青森県体育協会とは何かといえばゴルフ場です。アップダウンが激しく難しいコースで、カートも無いので、私はあまり利用しませんでした。妻がコンペ前になると一人で県協ゴルフ場へ行き、トレーニングをしていました。そのゴルフ場が最近閉鎖されたということを知り、大変残念に思っています。

私の青森での最も思い出に残る仕事といえば、東日本大震災後の復興対策でした。ちょうど2011年3月に地震がありましたので、そこからの約一年間は、知事をリーダーに副知事や関係部局の方々たちと一緒に、青森県の復興のため真剣に取り組ませていただいたのが一番の思い出であります。

青森県での任務の後、オーストラリアのシドニーに3年程おりました。先ほど司会者からの紹介にもありましたが、私は自治省に入って東京で勤務をしたり、また、地方で勤務したりして、日本の現在の情勢等は何となく分かってきましたが、やはり世界的な視野から見た日本というのはどういう感じなんだろうと、もう少し勉強してみたくなり、人事当局にお願いしてシドニーに行かせてもらい、3年程ですが、外から色々なことを改めて勉強させていただきました。

今年7月下旬にシドニーから日本に戻り、現在、自治体国際化協会の事務局長を務めております。自治体国際化協会というところは、地方自治体の国際交流や海外での経済活動を支援する組織であります。海外には7つの事務所があり、ロンドン、パリ、ニュ

一ヨーク、ソウル、シンガポール、北京、シドニーにそれぞれ事務所があり、例えば、青森県ではシドニーに職員を派遣して、オーストラリアのスキー客を八甲田に誘致しようと取り組まれています。

本日、青森に来たら雪が無くてびっくりしましたが、1月以降に八甲田の方にスキーに行けば、沢山のオーストラリアのスキー客が滑っていると思います。青森県の職員の方々が頑張って八甲田の魅力をPRし、外国からの沢山のお客様の誘致に成功した一つの良い事例だというふうに思っています。このように様々なミッションを担った職員が我々の各事務所で活動したり、単に自分たちのところの活動だけではなく、今、日本の自治体にとって何が必要なのか、その情報をリサーチしたり、その調査の報告をしたり、そういう仕事をしています。

2025年に青森県で国民体育大会が開催されるという話を聞いておりますが、今日は、我々がこれまでに行ってきた様々な調査ですとか、私がシドニー滞在を通じて感じたこと、あるいは最近のロンドンの話、さらにはラグビーワールドカップに係る関係者から聞いたことなどを踏まえながら、国際的な視野でのスポーツイベントの話をしていただきますが、大きなスポーツイベントをするときのポイントと伺いますか、アイデアというものは共通する部分もございまして、2025年に開催される青森国体に向けての何かしらのヒントを掴んでいただければと思っております。

私がシドニーに赴任して色々な驚きがあったわけですが、その驚きの一つが、「スポーツというのはすごいな」ということでありました。

オーストラリアは生活とスポーツが一体化しています。社会、経済、政治、そしてスポーツとの一体感があり、スポーツの影響力というもののすごさを感じます。日本においても、当然、スポーツというもののインパクトはあるのですが、なかなか日本で感じ得ない部分をシドニーで感じることができました。例えば、シドニーでは会社へ朝行く前にみんな何かしらスポーツをやっています。泳いでいる人もいれば、サーフィンをしている人がいたり、ジョギングをしている人がいれば、サイクリングをしている人もいます。また、ジムに行っている人もいれば、ちょっとしたウォーキングをする人もいます、というように何かしら体を動かしてから会社に行くのです。そして、会社が終わると、みんなお酒を飲むのが好きですから、パブでビールとかをガンガン飲んでいるのですが、その時に話す会話の内容の多くがスポーツの話です。

私自身、よく知らない人とも話をすることがありましたが、初対面でも地元スポーツの話題になります。パブの中にテレビ画面があり、スポーツ中継が常時流れています。日本の居酒屋さんでも、テレビがあつて、スポーツ番組が放映されていたりすることもあります。オーストラリアのパブではスポーツ中継以外の番組を観たことがありません。季節によって種目が違い、冬になるとラグビーをはじめ球の大きなスポーツの話題になり、夏になるとクリケットやテニスなどの話題になるというように、種目は変わるけれどもスポーツの話題に必ずなる、それほどまでにスポーツに囲まれたシドニーで過

ごしてきました。

まず、参考となる事例として紹介したいのが、2000年のシドニーオリンピック・パラリンピックです。どういうところがポイントかといいますと、2000年から2015年、私がいたのが2015年までですから、ちょうど15年経っているわけです。例えば、2025年に青森県で国体を開催したとして、その後の2040年のとき青森はどうなっているか。おそらく開催に向けてのこれからは、スポーツ施設など様々改修等をしたいと思います。2025年につくった建物やその地域は、2040年のときは一体どうなっているのか、そういう視点で私のスタッフがシドニーオリンピックの調査に入りました。

シドニーオリンピック。皆さんの記憶でいうと、高橋尚子選手がマラソンで金メダルをとったことかと思いますが、オリンピック会場というのは、シドニーの西部にあるホームブッシュといういわゆる昔の産業廃棄物施設の跡地、何も無かったところでありませぬ。逆にいうと、マイナスのイメージが強かった地域の大規模再開発によってメインスタジアムを完成させたのが、シドニーオリンピックです。15年が経ち、その地域を見てみますと、これは単にスポーツ施設だけではありません。その周りには大きなホテルがあり、オフィスビルが建ち並んで、大きな公園が整備され、教育機関、民間の住宅、さらには交通のアクセスも著しく向上しております。2012年にロンドンオリンピックが開催されましたが、コンセプトは同じです。大規模な都市の再開発という概念で彼らは物事を進めていっております。再開発という観点で大規模イベントをやるわけですから、単にスポーツ施設をつくるだけではなくて、その地域全体をどうやって伸ばしていくか、そういう観点でオリンピックのレガシーというのがつくられているわけです。

何点かポイントを挙げます。一つ目のポイントは、柔軟性があるかという点についてです。これは反面教師的なところもあるのですが、シドニーで2000年にオリンピックを開催するときに、開催した後どうしようかということは、正直、何も考えていなかったといつていいでしょう。オリンピックが終わって、最初のニューサウスウェールズ州の議会で、「どうして、今まで開催後のことを何も考えていなかったのか」と叱責されるくらい、レガシーのことに何も取り組んでいなかったのです。とにかくオリンピックを開催することで精一杯で、逆にいうと、何も考えていなかったからこそ、その後の色々な社会・経済情勢の変化に柔軟に対応できました。日本の場合であれば、おそらく2025年に青森で「国体が開催されます」、「開かれるとこうなります」、「その後はこのように活用されます」と、一生懸命に計画やら目標やらビジョンなりを作るのでしようけれども、なかなか社会の経済情勢というのは、そんなに上手く計画どおりに進むわけではありません。シドニーの場合、何も考えていなかったからこそ、その後、柔軟に対応していったケースといえます。

従って、色々大きな施設をつくりましたが、オリンピック終了後に、様々な改修や

変更が加えられています。陸上競技を開催したメインスタジアムは、すぐに別のところに移されました。当時、あまり考えていなかったスポーツにも対応しました。例えば、最近若者に人気のマウンテンバイク、ボードやスケートの施設を新たにつくりました。当時、あまり考えられていなかったスポーツ施設も、オリンピックが終わった後にどんどんつくられていく、そういう柔軟性があったといえます。ただ、このことが日本の場合にあてはまるかという、決してそうではなくて、オーストラリアは3%くらいの経済成長が20年以上続いた唯一の先進国で、経済が順調にプラス成長を遂げてきたからこそできた話であって、経済の伸びが不確かな国が柔軟性を持てるかといえば、なかなかそうはいかないと思います。しかしながら、物事を雁字搦めにとられることなく、その時の事情によって柔軟に変更できるということは一つのポイントと考えます。

二つ目のポイントは、多様性と多目的が確保されているかということです。オリンピックが開催されたメインスタジアムは、オリンピックの前後ものすごく利用されるのですが、その後は急激に利用が下がっていくのです。そこで必死に取り組んだのが、プロスポーツの誘致でした。メインスタジアムは、現在、ANZ（オーストラリア・ニュージーランド銀行）スタジアム、いわゆるネーミングライツを使っているスタジアムとなっておりますが、そこに大きなプロスポーツイベントをはじめ様々なイベント誘致をしています。過去と現在の使い方は全く違っており、多様性を上手くミックスさせているわけです。例えば、室内競技場アリーナは、オリンピックが終わった後の見通しが全く立たない状況でしたが、現在では絶好調なのです。なぜかという、イベントプロモーターが入ってきたからです。オーストラリアには様々なイベントプロモーターがいますが、ギャンブル系のイベントプロモーターやテレビ系のイベントプロモーターが入ってきて、エンターテイメント系ビジネスがそこで展開されるようになり、今では常に黒字の経済効果をもたらすアリーナ施設となっているのです。以上については、当初の目的にしばられることなく、様々な目的に使われるようになった事例です。国際的に有名な水泳会場は、シンクロや飛び込み、競泳など全ての競技がそこでできる、いわゆる複合型の施設をつくったのですが、ただ単に複合施設をつくるというのではなく、どうしたのかという、その後レジャー施設をミックスさせたのです。「ウォータープレイグラウンド」と称してスライダーをつくり、子供たちが遊べるような施設をつくりました。これはまさに遊園地ではないのかと思わせるほどのレジャー的施設でありながら、トップクラスの競技施設として、そこにはトップレベルのエリート選手たちが集まるし、子供たちも遊びに来る。このように、スーパーエリートの選手のため、そして、レジャーのための目的をミックスした施設にすることで、施設は維持されているのです。

また、学校の生徒たちが非常に良く利用するということです。オリンピックが開催された最高級の施設ですので、スコアボードだけでも学校の水泳大会等では、まず目にする事のないような物を利用できたり、また、ゴール時にタイムが自動計測されるタッチパッドが利用できることで、生徒たちはみんな喜ぶわけです。このように、トップレ

ベルの施設を地域の学校単位が利用できることで、利用者数の一層の増加につながっているのです。

さらにはオリンピック関連施設そのものが、スポーツ施設だけではなく、公園としての魅力を高めているのです。オリンピックパーク全体としては、スポーツ施設を求める人たちだけが集うのではなく、公園としての魅力がそこに周囲の人たちを運ぶ、そういう多目的、多様性を持った施設として成立していったということも、一つのポイントだと思います。

オーストラリアの場合、何がすごいかというと、結局は「スポーツが好き」ということであり、スポーツ施設を維持するために一番必要なことは、スポーツが好きな人を増やすことです。単純なことでありますが、絶対条件なのです。いくら優れた施設をつくって、いくら有力選手を育成したところで、スポーツをする人そのものの人口やキャパシティが増えていかないと、スポーツ施設というのは維持できません。その点で言うと、オーストラリアの人々というのは、もうスポーツ無しでは生きられない人たちばかり、みんなスポーツが大好きです。常に時間があれば体を動かしたくなる、だから、わざわざ時間をかけてオーストラリアから青森の八甲田までスキーをしに来て、大満足をして帰っていくのです。2025年の国体に向けて、青森県の人たちが「体を動かすことが好き」で、「体を動かすことはいいことだ」と思える県民性を育てていかなければ、いくら良い施設をつくっても維持していくのは難しいと思います。単にスポーツを「観る人」ではなくて、スポーツを「する人」が重要でして、オリンピックパークに訪問される方の場合は、「観る人」よりも「する人」の方が多くなっています。「やらなければ、見もしない」ということなのでしょう。スポーツをする人たちの数を増やしていく、それが一番の大きなポイントだと思います。

それともう一つの重要なポイントは、スポーツというのはビジネスであるということです。オーストラリアの産業の中でも、スポーツビジネスが占める割合というのは非常に高くなっています。様々な分野で付加価値と雇用を生むのがスポーツです。マーケティング、オペレーション、広告宣伝、さらにはマネージメント、単に施設を整備するだけではなく、スポーツを通じたビジネスはオーストラリアでどれくらいの雇用を生んでいるのか、これは、ぜひ青森でも参考にさせていただきたいと思います。

日本の人たちは、スポーツというものはピュアなものだから、ビジネスと一緒に考えるのは如何なものかと考えがちなところがあるかもしれませんが、オーストラリアではピュアにスポーツを楽しみながらも、何かしらそれをビジネスに活かそうとしていますし、様々なビジネスが考えられ、様々な経済効果と雇用を生むのがスポーツだと彼らは思っています。

次に、ロンドンオリンピックの話をしていきます。先程のシドニーオリンピックの場合は、後先について何も考えていなかったオリンピックだとしたら、ロンドンオリンピック2012というのは、レガシーということの本格的に意識した最初のオリンピックといえ

ます。さすが大英帝国だけあって非常にしたたかであり、レガシーというビジョンをしっかり持って取り組んでおります。2020年に東京オリンピック・パラリンピックがいよいよ開かれますが、その準備に係るスタッフの人たちは、現在までもかなりの回数、ロンドンへの視察に行っており、東京オリンピックでのレガシーをどうするかについて勉強しています。

ロンドンオリンピックの場合は、東部地域のいわゆる産業革命以来の工業地域で、化学物質による土壌汚染が非常にひどくなっていたところの再開発プロジェクトでした。また、ロンドンの中で最も貧困地域であり、その再開発としても取り組んでいます。都市の再生というのが、ロンドンの一つの大きなビジョンであります。私は当時、シドニーにおりましたので、ロンドンオリンピックは最も馴染みのないオリンピックでした。なぜかといいますと、シドニーでロンドンオリンピックをテレビで観てみると、日本とは全く違うスポーツばかりが流れるのです。日本人が出場するスポーツは全く映らないのです。例えば、ボートとかサイクリングですとか、そういうのが色々出てきますが、日本人がなかなか見当たらないということで、逆に、オーストラリアの人たちは、こういう視点でスポーツを楽しむ、あるいはスポーツの魅力を感じているんだなという意味では勉強になりましたが、日本人選手の活躍を最も覚えていないというのが私の印象です。その後、うちのロンドン事務所のスタッフが様々な調査をしたり、ロンドンオリンピックの関係者からインタビューをしたりして、当時のロンドンオリンピック時の情勢、さらには、先般、五郎丸さんで有名になったラグビーワールドカップがロンドンで開かれておりますので、その関係で様々な情報が入ってきております。今日はそういった観点からロンドンオリンピックでのポイントはどうかであったのか、そのレガシーはどのようにつくられていったのかについて話したいと思います。

レガシーというのは、現在、オリンピックにおいて5つに分けられています。「スポーツレガシー」、「社会レガシー」、「環境レガシー」、「都市レガシー」、「経済レガシー」の5つであります。まず、ロンドンの「スポーツレガシー」は何を目指したか、ロンドンは青少年、社会人、そしてエリートの方々に様々なスポーツの機会を提供することをビジョンとして持ちました。青少年に対しスポーツ機会の提供を進めよう、5歳から16歳は週6時間スポーツを実施するという数値目標を掲げ、とにかく週6時間スポーツをやらせました。さらには、イギリス全体が肥満の国であり、全体の4分の1の成人が肥満といわれています。その肥満対策の一つとして、英国に欠けていたのが競技スポーツであるということで、学校版オリンピックをつくったんです。学校版オリンピックをつくって、各地域でスポーツイベントやスポーツ競技をやっていこう、そして、人々をスポーツに引き込んでいこう、そのようなことをしました。社会人に対しては地域スポーツに対する支援活動であります。「プレイス・ピープル・プレイ」と言い、プレイスというのは場所です、まず地域スポーツの拠点となる場所を整備していきましょう、ピープルというのはスポーツをする人たちを支援していきましょう、プレイはスポーツす

る機会を与え、様々なスポーツイベントを開催していきましょう、それによって多くの人たちをスポーツに巻き込んでいきましょう、そういうムーブメントを起こしています。

さらにはエリートの養成、これは競技としては一番重要なポイントであると思います。その当時の目標として、メダル獲得数でイギリスは4位を目標としていましたが、本番のロンドンオリンピックでは、イギリスは3位という成果を収めています。最近、どうも国民体育大会における青森県の成績が芳しくないと聞いております。これは参考文献に書いてあるところを読んでいただきたいのですが、青森においてもこのスポーツエリートの養成については、2025年に向けてはぜひとも取り組んでいただきたいと思えます。

我々の大きなプロジェクトの一つに、世界中から青年を呼んで学校現場で英語教育を指導したり、青森県庁でも実施していますが国際交流の場で通訳をしたり、さらにはスポーツ指導をしていただいたりしています。世界のスポーツのリーダーの方々を各地域に呼んで、その人たちのスポーツを支援する、もちろん外国の方々ですので、その分、語学の勉強や国際交流活動も同時に行えるというメリットもあります。SEA（スポーツ交流員）を受け入れていただいているところを見ても、和歌山県、長崎県に各3人ずつ受け入れていただいております。ご承知のとおり、両県とも国体が開かれたところです。そこに我々のスポーツ交流員を招聘し、その地域のスポーツ活動をバックアップする、さらには彼らの持っている国際的なノウハウを色々なレベルで活用する、これは市町村レベルで呼んでいただいても結構ですし、全面的にバックアップしますので、ぜひ、このような活動にも積極的に取り組んでいただけたらと思います。

次に、「社会レガシー」というのは、文化、芸術あるいはボランティア、地域の誇り、地域の歴史というものを見直すということですが、少し視点を変えて、私が提案したいのは、ある大きなスポーツイベントをするときに、その地域の文化を発信したり芸術の催し物をしたりして盛り上げる、これはおそらくやと思いますが、その文化・芸術というものの、ちょっと脇にある社会的な芸術というんでしょうか、これにもぜひ取り組んでいただきたいというのがお願いです。例えば、先程申しましたイギリスでのスクールゲームズという学校版オリンピックでは、もちろん芸術や文化的活動も一緒にやるのですが、その活動以外に、レポーターやメディア、さらにはブログ、こういうことの競争も一緒にやるのです。マスメディアの人材を育成しようという観点で、レポーターの取組をしたり、色々なジャーナリズムのことをそこでやったり、ブログについても、今では大きなビジネスになりますので、ブログでうまく情報発信することを練習したり、マーケティング、デザイン、スポーツ製品、そういう、若干、文化・芸術とは違うけれども、今の社会にとって必要な知識であるとか経験を若い人たちにそこで学ばせる、単に昔ながらの伝統的な文化・芸術の分野だけに限らず、今、社会のニーズとして必要な知識だとかノウハウだとか、そのようなことも大きなスポーツイベントのときには、若い人たちに経験させ、そのことが将来、彼らの技術としてブラッシュアップできるよう

に、ぜひそういうことにも取り組んでいただきたいと思います。

ボランティアプラスというのは、ボランティアもおそらく活用されると思いますが、その活用の仕方として、例えば、ロンドンオリンピックのときは、ボランティアのことをゲームズメーカー、要するに彼らがゲームをつくるんだ、という表現にして自分たちがどのように関わっているのか、やはり、呼び方ひとつで変わるんですね。単なるボランティアに参加していますというより、私はゲームズメーカーですと言った方が、よりロンドンオリンピックに対する関わりが強まり、それ自体が自分の誇りにもなる。さらに言いますと、非常にシステムティックにやられているので、ゲームズメーカーには約800種類もの役割を与えているのです。2025年に青森国体開きますと言えば、ホームページを立ち上げると思いますが、その際、ホームページの管理はゲームズメーカーにやらせるのです。上手い人は沢山います。あるいは日程管理、日刊紙の発行、アンチドーピングなんかにもゲームズメーカーが関わっています。さらに言えばプロトコール、沢山の要人やVIPの方もいらっしゃるでしょう、そのプロトコールまでゲームズメーカーが関わっています。一般的なボランティアじゃなくて、本来は公的な団体がやっているところにも、今の時代は沢山の人材がいますから、様々な分野において、彼らのノウハウですとかやる気を引き出すような、そういうボランティアの仕組みというものをぜひとも考えてもらいたいと思います。

ロンドン市では、ロンドンアンバサダーという制度をつくっています。主要な駅や観光施設では、ロンドンアンバサダーというボランティアが同じユニフォームを着て、受け入れ体制を構築しています。これもまた、やはり呼び方ひとつであります。自分はロンドンアンバサダーですということで皆さんを受け入れている、そういうことで、彼ら自身のボランティアとしての誇りも生まれるわけです。さらに、このボランティアをするときには、スポンサーとしてマクドナルドが入っていることから、カスタマーサービスの訓練をして、資格を取らせることもしています。

カスタマーサービスの訓練をして資格を取ることで、ボランティアをした後の、彼らの新しい就業の機会にもつながる。単にボランティアをするのではなくて、それがさらに彼らにとってステップアップできるような、そういう仕組みを考えることも重要かと思えます。

次に「環境レガシー」、これは青森の皆さんにとっては得意分野かなと思っております。再生エネルギーの利用というのは、青森も世界のトップランナーを走っているわけですから、ぜひとも環境の最先端を誇るような国民体育大会にすることも一つのポイントかと思えます。ロンドンオリンピックの場合は、先程申しましたように、産業革命以来続いた工業地帯であり、化学物質が大量に埋まっているところでありましたから、この土壌汚染をいかに除去するのが彼らの環境レガシーであります。

次に「都市レガシー」、これは都市の再生であります。単に競技スポーツ施設をつくるのではなく、そこの周りにどのようなビジネスが生まれるのか、そこの周りにどのよ



うな居住関係ができるのか、そこの周りにどのような新しい人の流れや交通アクセスが生まれるのか、それをうまく考えていかなければいけないと思います。おそらく青森国体のメイン会場は宮田地区になるんでしょうか、そこにも単にスポーツ施設をつくるのではなくて、青森県あるいは市にとってどういうふうな地域として育てていくのか、どういう交通をつくっていくのか、人の流れをどうやってそこの地域に持っていくのか、そういうことを考えながら進めていくと、さらに付加価値のついたレガシーが生まれるんじゃないかなというふうに思っています。

次に「経済レガシー」、これはロンドンはしたたかであります。大規模スポーツイベントをやるときには、ハード面の整備だけではなく、大会運営というソフト面において、様々なビジネスや契約機会というのが生まれます。青森でも施設改修等で入札発注の手続き等がすでに始まっていると思いますけれども、英国の場合は、官民連携のロンドンビジネスネットワークというのがつくられています。ロンドンビジネスネットワークをつくって、それ専用のウェブサイトを立ち上げ、要は発注情報等を地元の企業に提供するのは。地元の企業はそこに登録し、どんな発注があるのか、自分たちにとってはこんな受注ができるのではないかというようなことが容易に検索できるサイト、これはあくまでも地元（英国）企業向けです。青森でいうと、青森で色々な施設整備及び改修や大会運営などの委託、これらの発注情報をホームページ上の専用サイトに掲載し、事業者はそれに登録すれば自分の関心のあるところを検索すればいいのですから、こんな発注があるんだとか、こんなビジネスチャンスがあるんだとかというのが一目でわかる仕組みになっているのです。彼らは、できるだけ英国の企業にとらせており、地元の雇用を優先しています。ちなみに、施設整備の関係でいえば、98%が地元英国の拠点企業が入札を落としており、さらにいうとその3分の2が中小企業に発注しているというくらい、地元有利の契約環境をつくっています。

これは色々な入札制度の関係もあり、どこまでできるのかという問題はありますけれども、地元の雇用を優先する、地元の経済を優先するのは、スポーツイベントをやれば大きなお金がかかるわけですから、これを東京の大企業に持っていかれたら、何のために青森の税金を使うのかという思いがあります。確かに、「青森でスポーツイベントをやります、お金がかかります」と言えば、私が昔いた県総務部（財政課）あたりは、「何のためにこんなにお金使うのか」と一番指摘されやすいと思いますが、「こんなにお金を使っても、これだけの経済効果が青森県にはあるのです」と堂々と持っていけば、予算も付きやすくなると思います。そういう考えもなしに、「これだけお金がかかるんです」だけでは、スポーツの関係者の理解は得られても、県民全体の理解を得るというのは難しいということで、どんなに皆さんが良いことをやろうとしても、多くの人たちをうまく巻き込んでいく、特に企業の方々は、「国民体育大会をやる、いいじゃないか」とか「僕たちにも何かしらビジネスチャンスが生まれるのではないか」とか、そんなふうにするような取組をぜひ進めていただけたらと思います。

さらに言うと、英国の場合は色々な施設改修だとかビジネスに参入した人には、認証ライセンスを与えるのです。あなたはロンドンオリンピックのこういう施設改修、こういう大会運営に参加したというライセンスを付与するのです。ライセンスを与えられた企業は、現在、何をしているのかというと、ロシアのワールドカップ、ソチ、リオ等、これからのオリンピックの受注にどんどん行っています。彼らは世界を舞台に新しいビジネスを生んでいる、そんなことまで英国政府はやっています。これは英国ならではの大规模スポーツイベントに対する取組でありますので、どれだけ真似できるのかというところはありますけれども、ポイントというか、視点というのは大事だと思います。ぜひそういう視点も持ちながら進めていってほしいものです。

観光プロモーション、これは当然やると思います。青森は観光プロモーションが得意ですので、これは特に言いませんが、大きなポイントとしては、やはりアコモデーション、宿泊施設、これだけ多くの人たちが来るときに、どのようなオペレーションをするのか、これは単に国民体育大会だけではなく、これから観光需要が増えてきたときに、結局、アコモデーションがなければそこには人が来れません。だから、どのようにしてアコモデーション、宿泊施設と交通機関を上手く連携させて宿泊施設を増やしていく、うまく全体でバランスをとっていく、大きなイベントがあつてたくさんの方が来るときにうまくそれをオペレーションする、そのような取り組みも必要になってきます。アコモデーションを計画的に整備していくというのも国体開催に向けた一つのポイントかと思います。さらにいうと、それに合わせてロンドンでは従業員のホスピタリティ教育も一緒にやりました。それによって観光の付加価値をさらに高める、宿泊施設のキャパシティをより高めていく、そして、地元雇用機会を与えていく。オリンピックを開催したところはロンドンの一番の貧民街でありましたから、失業率が一番高い。新しい雇用にできるだけ失業者をあてるため、就業のためのスキルアップや支援を行いつつ、彼らに対し、例えば大会運営の時に臨時的に雇ったり、施設の建設作業の中に入れたり、大会後にできたショッピングセンターで雇用したりとか、そういう流れをうまくつくっているわけです。

2019年にいよいよ日本でラグビーワールドカップが開かれます。2015年にはロンドンで開催されたわけですが、ここでのポイントとしては、大会の特徴は何なのか、ということです。ラグビーワールドカップの一つの大きな特徴は大会期間が非常に長いということです。皆さんご承知のとおり、ラグビーはフルコンタクト、いわゆる格闘技です。格闘技ですからぶつかり合いますので、そのぶつかり合ってきた怪我を治すには時間がかかるわけです。期間が必要なので、試合間隔が長くなる、よって大会期間全体が長くなる、オリンピックは16日間、サッカーワールドカップは約一ヶ月ですが、ラグビーワールドカップは7週間(約50日)と最も大会期間が長い世界的なスポーツイベントとなるわけです。長いというのはどういう事か、世界中から来た彼らのサポーターたちは長い間日本にいるということです。ちなみにニュージーランドで開かれたラ

ラグビーワールドカップの時の外国人のステイの平均の長さは一ヶ月です。一ヶ月滞在するわけです。もう一つにラグビーは紳士のスポーツでといわれています。オーストラリアの場合、ラグビーは大きく3つに分けられます。AFL(独特なオージーフットボール)、ラグビーリーグ(ユニオンからプロ化した、よりスピーディーなユニオンから分化したグループであり、プロスポーツとしては非常に人気がある)、それからラグビーワールドカップで行われる一般的なラグビーユニオンの3つがあります。人気の順としてはAFL→リーグ→ユニオンの順となっていますが、ユニオンの強みは何かというと、観ている人たちはみんな金持ちということです。オーストラリアのビジネス界にはラグビー出身のトップが沢山います。ユニオンネットワークというのがオーストラリア全体の経済を牛耳っているといっても過言ではないように、世界中のラグビーサポーターは、基本、富裕層なのです。一生働かなくても暮らしていける人たちもたくさんいるでしょう。そういう人たちが一ヶ月間、日本に滞在し、試合のない間は優雅に日本国中を旅するのです。

残念ながら、青森はラグビーワールドカップの開催地ではありませんが、ここには大きなビジネスチャンスや観光PRのチャンスがあるわけです。要するに、うちはラグビーワールドカップの開催地でないから関係がないではなく、それぞれの開催の特徴を活かし、どういうことが我々にできるのか、あるいはどういうことを我々はしなくてはいけないのかという視点が必要だということです。これは、青森の国民体育大会でも同じです。国民体育大会の特徴は何なのか、それに応じて色々なアイデアが生まれてくると思います。ある意味、皆さんにとっては今が2025年に向けてのキックオフと思いますが、結局、青森国体に向けて、青森県は何を目指すのか、それに向けて何を育てるのか、そして何を残すのか、さらに言うと青森国体の特徴は何なのか、以上の4つの視点を持って、これからの10年間を進んでいってもらえたらと思います。正直言いますと、国体というのはマンネリ化しています。もうそろそろ新しい息吹といいたまうか、前例にとらわれることなく、新しいアイデアのもと「青森モデル」というものをぜひともつくっていただきたいと思います。

私にとっての2020年東京オリンピックのレガシーは、国民がスポーツにより親しみ、スポーツが国民をより豊かにする新たな社会の幕開け、青森の2025年の国体でいえば、青森県民がスポーツにより親しみ、スポーツが青森県民をより豊かにする新たな青森社会の幕開けであることを期待して私のお話とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。